

図書館だより

No. 27

●「^{きざし}夢の階」…… 外国語学部長・ロシア語学科教授 村田 真一

●教えて! ソフィアンくん

～ 第10回 国立国会図書館デジタル化資料
送信サービスが始まります!～

●上智大学後援会からのご寄付により、DVD資料を購入しました!

●豆知識 …………… 図書館から見える景色

●図書館からのお知らせ

●図書館ツアーのお知らせ



「^{きざし}夢の階」



外国語学部長・ロシア語学科教授
村田真一

演劇や文学の研究・教育に携わっていると、想像力を大きく飛翔させなくてはならないことがある。そして、しなやかな構想がなかなか浮かばないときほど、めずらしい本との邂逅は、ワクワクする運命的な旅ようになる。

大学2年目の春の黄昏時、仲間と図書館でロシア語劇上演にふさわしい作品を手分けして探していたとき、ロシア革命後の文壇に登場したミハイル・ブルガーコフ(1891-1940)の『イヴァン・ヴァシーリエヴィチ』(1936年)の翻訳を落掌した。人生計画が変調をきたし始めたのは、その瞬間だった。

ストーリーはわかりやすい。1920年代のモスクワのアパートへ泥棒に入った男とそのアパートの管理人が、発明家の作ったタイムマシンでイヴァン雷帝の16世紀へ飛ばされ、雷帝は1920年代の世界へ。両者ともやがて元の鞘に収まるが、すべては発明家の夢だったというところで幕。

文豪ブルガーコフが箸休めに綴ったSFコメディのようだが、さまざまな文学作品や劇作法が織り合わされ、16世紀のロシア語までふんだんに採り入れているうえ、スターリン体制への揶揄もたっぷりある。全編に妖気漂い、テンポもよいから、演じるほうも観る方も飽きない。これは、創作の集大成である長編『巨匠とマルガリータ』へ直結する作品ではないか。当局から睨まれ、生涯一度も出国を許可されなかった作家の放った「時間は伸縮自在」という言葉の意味も軽くはない。しめたとばかり、演出プランを立てつつ、東の空が白むまで味読した。翌日の夢の中では、もう舞台の幕が上がっていたと思う。

気の早い悪魔が目覚め始める夕暮れにふらっと図書館などへ行かなければ、ここまで演劇にのめりこむこともなかったろうに。いや、実はまだ春の夜の夢から覚めていないだけなのかもしれない。

その後、台詞をできるかぎり早く覚えようと、パリ経由で入手したオリジナルのコピーを携えてソ連の旅へ持っていったが、横浜から波にもまれてたどりついたナホトカの入国審査で、「コレワ、ナンデスカ?」「ナンノタメニ?」と質問攻めに。ブルガーコフは彼の地では反体制とみなされ、名誉回復されたのは1955年である。私が旅したときはそれから20年あまりも経っていたが、ドタバタ映画はあっても、戯曲の完全版はソ連では手に入らなかった。一度失われた芸術テキストは、そう簡単に復元されない。ロシア語学習用だと答えてその場をしのいだが、別室でコピーをとられたのか、丁寧に返されたのが30分後。作品は、国境警備隊の「お宝」になったはずだ。「地下文学がはやる国だ。これで文化発展に寄与できたんだ」と思い、この顛末を武勇伝に帰すことにした。

奇しくも数年後、ペレストロイカが始まり、体制は崩壊へと向かう。そして、因縁というのか、日本のニュース番組で、ソ連邦解体の現地報道の第一声を私が同時通訳する。一瞬、夢幻かと思ったこの出来事は、現代史に大きな1ページを加えた。

図書館が下調べや試験の「傾向と対策」だけに占領される場となってしまったら、あまりに寂しいではないか。フロアで「道草」を食ううち、ふと手にした本を開くと、何年も前に読んだ人たちのまなざしやため息が感じられる。そして、その一冊が煌めく世界へいざなってくれる夢先案内になる。図書館は宝の箱だと思う若い人がふえてくると、こちらとしては、煩わしい日常から解放されて表情が一気に緩むのだが。

そう思った矢先、「宝箱」から飛び出たばかりの学生から、「おもしろい戯曲が見つかりましたよ!」と、元気な声。だれかの轍を踏んでほしいとはけっして望まない。ただ、^{きざし}夢の階で迷わないように見守ってあげたいものだ。